

水泳を取り巻く課題

—押し迫る民間委託に対して
何ができるのか？を考えよう—

2022.2.17 オンライン研究部学習会

今日の話の流れ

1. 水泳が危ない⇒民間委託の問題

地教委で着々と進む民間委託
教師が指導しなくて、本当に良いのか？

2. ドル平を行う訳

「口から吸って、鼻から出す」呼吸でつまづく子どもたち
学習指導要領の変化
ドル平における技術指導の系統性

3. 水泳「水辺文化」分科会がやってきたこと（水泳の課題）

学校づくり・職場づくりの重視
能力別指導（習熟度別指導）と対峙
水泳実践の可能性を追究

4. これからの水泳の在り方について

民間委託は避けて通れない問題
どう闘っていけるのかを考えましょう。（英語教科化の二の舞にならないためにも）

1. 水泳が危ない⇒民間委託の問題

地教委で着々と進む民間委託

朝日新聞「耕論」から

埼玉県北本市、千葉県佐倉市の民間委託の取り組み

朝日新聞「耕論から」2021.7.23

制野俊弘氏（和光大）は、自身の東日本大震災の体験から「水難から命を守る基礎学力」として水泳は不可欠

「地域に一つプールを確保して融通し合い、民間に指導を委託する。その分浮いた資金や労力を、オンライン授業の環境づくりに振り向ける」

渡辺由美子氏（NPO法人キッズドア理事長）

「水泳授業は先生も負担が大きい。水難事故を防ぐ指導や、泳ぎに触れる機会を年に数回、イベント的にすれば十分」

高橋秀実氏（ノンフィクション作家）としている。

水泳を取り巻く諸問題

プールの老朽化⇒改修が当たり前と言えない⇒壊して跡地利用にしたら
千葉県佐倉市 大阪府枚方市

支部ニュース552号「教育の民営化がもたらすもの」(市川さん)

⇒民間委託への流れ

教師の働き方改革⇒夏期休業中の教師の負担。
プール開放が社会体育に位置付いていない。
浄化槽の稼働、薬品投与
⇒夏期休業中の水泳指導
水泳指導そのものの体への負担
プール開放を行っても参加者が少ない。

<コロナ禍以前からの水泳指導の変化>

指導回数、指導時間の大幅減

夏休み中の指導の中止、回数減⇒緑のプール

二学期の水泳をなくす⇒運動会の練習に⇒子どもが熱中症で倒れるのは当たり前

【その理由】

- ・本市児童の泳力低下、天候に左右されやすい
- ・プールの老朽化。民間スイミング利用の方がコスト削減

【事業のPR】

- ・スイミングクラブを利用することで、「学校だけでなく、地域にも自分たちは見守られてきた」と子どもたちの心に残り、地域への愛着の醸成につながる。
- ・多くの指導者、専門的な知識を持った指導者が確保できることで、より安全かつ計画的に、児童生徒一人ひとりの泳力や興味関心等の状況に即した水泳指導が行える。このような指導を行うことで、水泳の楽しさを十分に味わわせられるものと考ええる。

【実施方法】

- ・1つの学年で週1回（2時間）計4回水泳授業を実施
- ・学校とスイミングクラブの送迎は、クラブのマイクロバスを活用
- ・実際の授業では、習熟度別グループに分かれ、グループ毎にインストラクターの指導を受ける。
- ・教員は、水中及びプールサイドでの指導、学習評価を行う。

民間委託への流れ

千葉県佐倉市（2018年～）

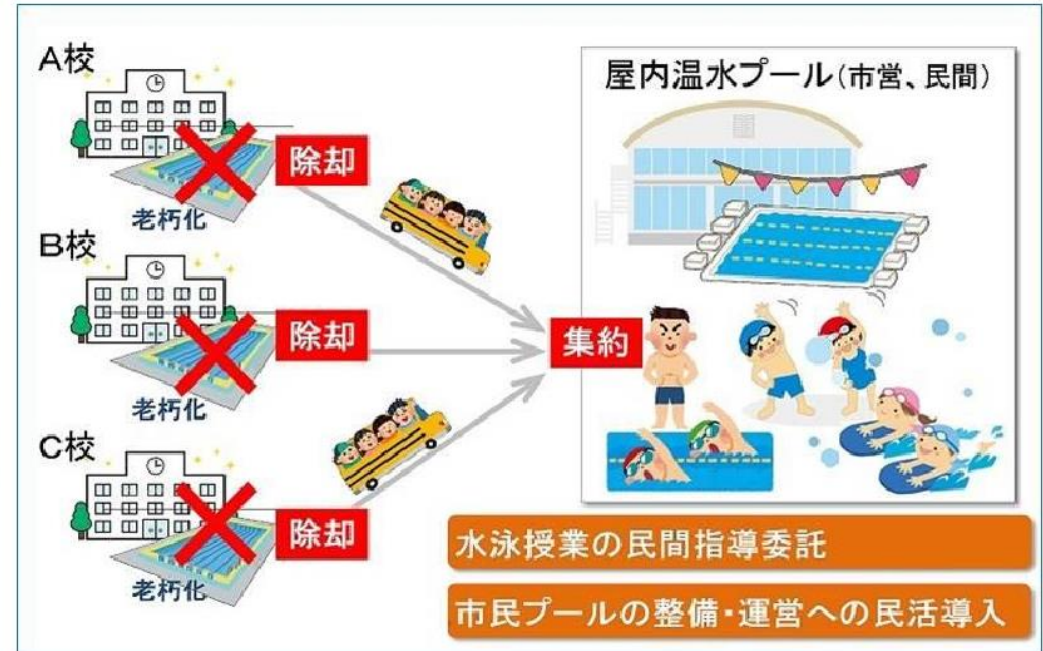
- ・ 学校プールの維持管理費を抑えるため、平成25年度から小学校1校でプールを廃止し、水泳の授業は民間スイミングスクールで実施（平成30年度時点で2校）
- ・ 水泳授業の民間委託により、学校プールの維持管理コストを削減するとともに、安全管理面の教員負担も軽減。水温や水質、衛生面の環境も安定。
- ・ 平成30年度には、残りの32校の学校プールおよび2か所の市民プールを対象に、再編・再整備を通じて施設量の適正化や施設ライフサイクルコストの削減を図り、民間活力の導入の検討及び実現可能性の検証を行い、財政健全化に資する再編事業モデルを立案する調査を実施予定。

<水泳事業の民間委託の様子>

<再編事業モデル立案調査の検討イメージ>



敷地内まで
バスで送迎



民間委託実施により想定される効果と課題は以下のとおりと考える。

効果	◎ 専門指導者＋教職員による安全管理面の向上 ◎ 教職員の学校プールの維持管理負担の軽減 ○ 指導スタッフの増加による水泳レベルに応じた指導者の配置
課題	△ 年間カリキュラムの変更、関係者間の調整(特に中学校) △ 安定・継続した水泳授業の受入れ先の確保 (民間プールにとって貸切、単年契約など制約が多い。) △ 民間への指導委託費用の負担

- ・ 1校あたり年間約1000万円、市全体で年間約3000万～3200万円が維持管理にかかっている。
- ・ 平成29年度の内訳は、維持管理費が9割、修繕費が1割となっている。維持管理費の約8割が水道代と推測される。

- 既に2校での実施が定着しており、学校現場サイドでも民間委託は肯定的である。特に、スタッフ数の増加による「安全面の向上」、「能力別の指導」への期待が大きい。
- 民間プール施設は、休館日を利用すれば概ねどこも受入れは可能である。水泳授業で必須となっている着衣泳についても一般利用のない休館日であれば実施可能である。
- マイクロバスを所有しているプール事業者は限られているため、こうしたプールを利用する場合には市によるスクールバスの手配も必要となる。

■小中学校プール廃止の効果

・ 廃止による効果としては、

①指導面の充実、②安全面の向上、③施設維持管理面の負担軽減、④経費節減等が挙げられる。

①指導面の充実としては、天気に左右されず計画的に水泳授業が実施できるようになったこと、プール管理の必要が無くなり教員が児童生徒の直接指導に時間を費やせるようになったこと、特に障害のある児童の一部にとって大きな障害（ストレス⇒パニック）となっていた急な日程変更がなくなったこと、などである。

②安全面の向上としては、プール施設に常駐する監視員により監視体制が充実したこと、光化学スモッグ注意報発令等による授業中止の心配がなくなったこと、鳥のフン等による細菌混入等の心配がなくなったこと、などである。また、東日本大震災の時には、放射能の影響を心配することなく、屋内で安心して水泳授業を実施することができた。

③施設維持管理面の負担軽減としては、約2か月間の水泳授業のために負担していたコストが不要になったということ、などである。

④経費節減としては、工事費として約26億6千万円の削減を見込んでいる。

建替え費用：1校あたり1億4000万円⇒19校で26億6千万円

想定されるリスクとリスク分担の考え方

『佐倉市学校プール・市民プール再編に向けた調査業務委託 報告書』 2019年1月 115頁

表 水泳指導補助の民間委託において想定される主なリスクの内容とその分担、対応方策(案)

リスク分類	リスクの内容	負担者		リスクを回避・低減する方策
		佐倉市	事業者	
1) 事故リスク	水泳指導中、インストラクターの重過失や故意の過失のためにおきた事故		●	・ 監視員の配置人数の確保
	水泳指導のための移動中に事故が発生した場合(委託にバス送迎を含む場合)		●	—
	上記以外の民間事業者の責めによらない事故	●		—
2) 犯罪被害リスク	盗撮や痴漢行為などによる犯罪被害	●		<ul style="list-style-type: none"> ・ プールは貸切とし、一般利用者の使用を禁止 ・ 見学スペースの立ち入りを制限(保護者含め)
3) 災害リスク	水泳授業中、或いは移動中の災害(地震等)による被害	●		・ プール施設における避難経路等の事前確認
4) 施設リスク	水泳授業に伴うプール施設・設備の損傷(経年劣化によるものを除く)	●		—
5) 計画変更リスク	学校側の都合による水泳授業の実施日時等の変更によるもの	●		<ul style="list-style-type: none"> ・ カリキュラム調整を含む十分な準備期間の確保
	事業者側の都合による水泳授業の実施日時等の変更によるもの		●	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予備日の設定

ここまでのまとめとして

- ・ プールの老朽化に伴い、プールを改修・修復するのではなく取り壊し、跡地利用を進めている。
(平成24、校舎の耐震補強工事に合わせ、老朽化したプールを取り壊しプール跡地を「まごころ広場」として有効活用。
千葉県佐倉小)
- ・ 水泳指導を民間委託する。(バス移動、教師の引率。指導は教師+インストラクター)
スイミング方式の能力別指導、指導の実質は、インストラクターによるもの。
当然、スイミングの教程が持ち込まれる。
- ・ 民間委託は、教師の働き方改革にも繋がっている。
- ・ 実験的に行った民間委託は、子ども、保護者、教師からも、賛同を得ている。

<考えたいこと>

- ・ 教師が指導を行わなくても良いのか？能力主義の教育がより強まる。
- ・ 水泳をスキーやスケートと同様の位置づけに。

2. ドル平を行うわけ

大事であるはずなのに、明確になっていない息つき。
「口から吸って、鼻から出す」呼吸でつまづく子どもたち

学習指導要領の変化
呼吸を重視した指導へ

ドル平における技術指導の系統性

息つぎの不思議

息つぎは、息を鼻から出して口から吸うという指導が（今でも）ほとんど。
その理由として、

- ①学習指導要領にも息つぎに関しては、「**水中で息を吐いたりすること**」と書かれているから。スイミングでもそう教えられているから。
- ②水泳選手は、ほとんどが鼻から息を出しているから。

↓ それに対して

学習指導要領は少し変わってきている。

初心者の指導に競泳の指導を用いて良いのだろうか？

- ・鼻から出し⇒口から吸う、という呼吸法は、非日常的な呼吸法である。力を入れて息を出し切った反動で、鼻から水が入って、鼻が「つうん」となる場合が多い。
- ・一気に鼻から息を出すのは、口と比べ通り道が狭いために、時間を要する。

↓

だから、息こらえ⇒水上に顔が出たら、**一気に「パッ」と吐いて、一気に吸う。**

息つきについて学習指導要領では

<2011年>

学習指導要領では、低学年の水泳の目標に、「イ 浮く・もぐる遊びでは、水に浮いたりもぐったり、水中で息を吐いたりすること。」と記されています。

ところが、例示の中には、バブリングやボビングとして、「水に顔をつけ口や鼻から息を吐いたり、息を止めてもぐり、跳び上がって空中で息を吸ったりすること。」とあります。水中でブクブク息を吐くのが前半のバブリングで、息を止めて水上で呼吸するのが後半のボビングです。相反する動作を例示しているので、「では、息を水中で止めるのか、あるいは両方できなければならないのか？どっちなのか」と、問いたくなるような書き方です。

<現行>

「イ もぐる・浮く運動では、息を止めたり吐いたりしながら、いろいろなもぐり方や浮き方をすること。」
※しかし、バブリング、ボビングは併記されている。

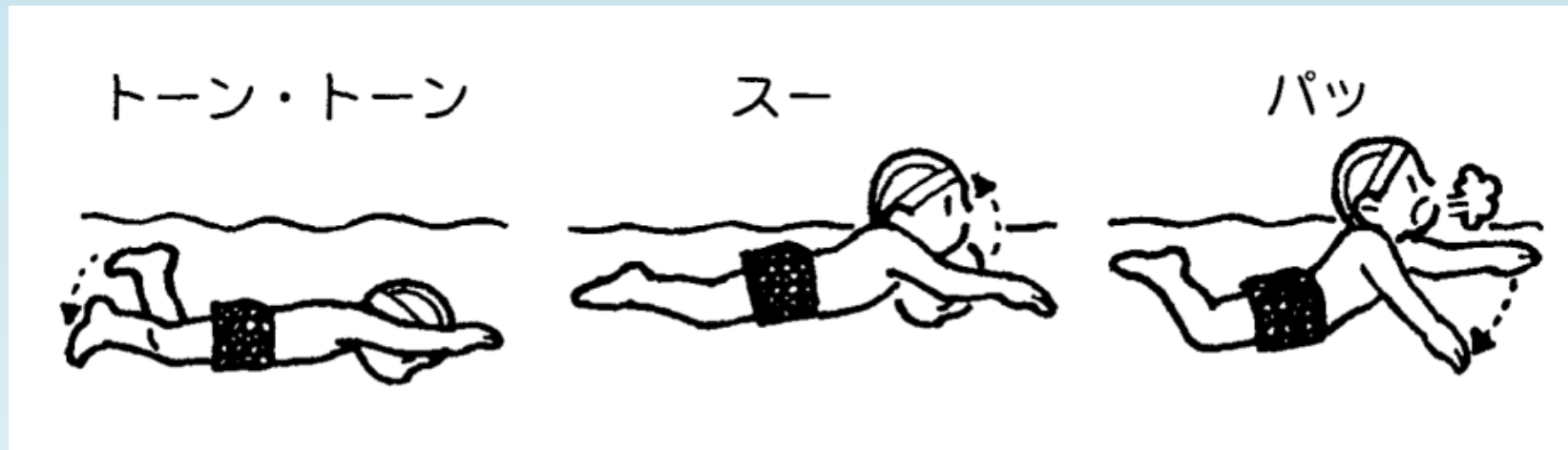
「息を止めたり吐いたりしながら」とあるように、少しの変化が見られる。

学習指導要領の水泳指導の変遷(主に中学年の内容から)

2002年(平成14年)	2011年(平成23年)	2020年(令和2年)
<p>3年→基本の運動 浮く・泳ぐ運動</p> <p>4年→水泳</p> <p>5年・6年→水泳</p>	<p>1・2年→水遊び</p> <p>3・4年→浮く・泳ぐ運動</p> <p>5・6年→水泳</p>	<p>1・2年→水遊び</p> <p>3・4年→水泳運動</p> <p>5・6年→水泳運動</p>
<p>【3学年】</p> <p>例示</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伏し浮き ・ばた足泳ぎ ・面かぶりばた足泳ぎ ・かえる足泳ぎ(補助具使用) ・面かぶりクロール ・補助具を使って呼吸をして泳ぐ 	<p>・中学年段階での泳力の達成度が低いために、4年の「水泳」を浮く・泳ぐ運動に変更。中学年段階で基礎的条件を整えるための呼吸の習得を</p> <p>【3・4学年】</p> <p>D浮く・泳ぐ運動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな泳ぎやけ伸び ・補助具を使ってのキックやストローク ・呼吸をしながらの初歩的な泳ぎ 	<p>【3・4学年】</p> <p>ア 浮いて進む運動では、け伸びや初歩的な泳ぎをすること。</p> <p>イ もぐる・浮く運動では、息を止めたり吐いたりしながら、いろいろなもぐり方や浮き方をすること。</p> <p>※初歩的な泳ぎとは、呼吸しながらのばた足泳ぎやかえる足泳ぎなど、近代泳法の前段階となる泳ぎのことである</p>

ドル平泳法

ドル平とは「浮く」「息つき」「すすむ」の泳ぐために必要な3つの要素だけをつかって泳ぐ泳ぎ方のことです。ですから、手のかきも、足のけりも、やりやすいように行ったらいいのです。とにかくリラックスして泳ぐことができると、何mでも泳ぐことができる泳ぎです。



呼吸・リズム・リラックスを大切にした泳ぎです。

ドル平の科学性

アルキメデスの原理から

頭の重さはだいたい3.5kg(大人)

※水上に頭を出したら、大人は3~4kg、子どもは2~3kgのダンベルを持っているのと同じことになる。できるだけ頭を水中に沈めた方が浮きやすい。

息を止めた方が浮きやすい

ヒトの体積は呼吸の度に変化するので、息を吸った状態では浮き、息を吐き出すと沈みやすくなる。

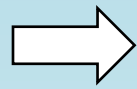
パッとまとめて吐く

一気にまとめて吐く(肺胞収縮)ことによって、反射的に吸気を誘発する(吸息)肺迷走神経反射を利用。(Hering-Breure反射)



ドル平の指導過程

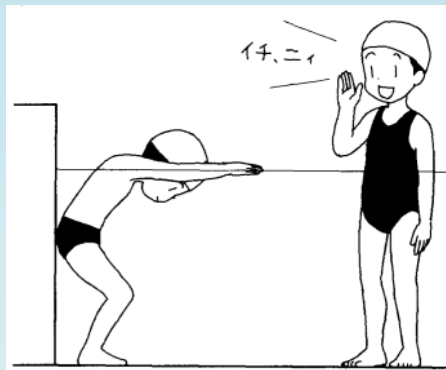
①浮き



③ふし浮き呼吸 (浮きと呼吸の結合)



②呼吸



④ドル平泳法

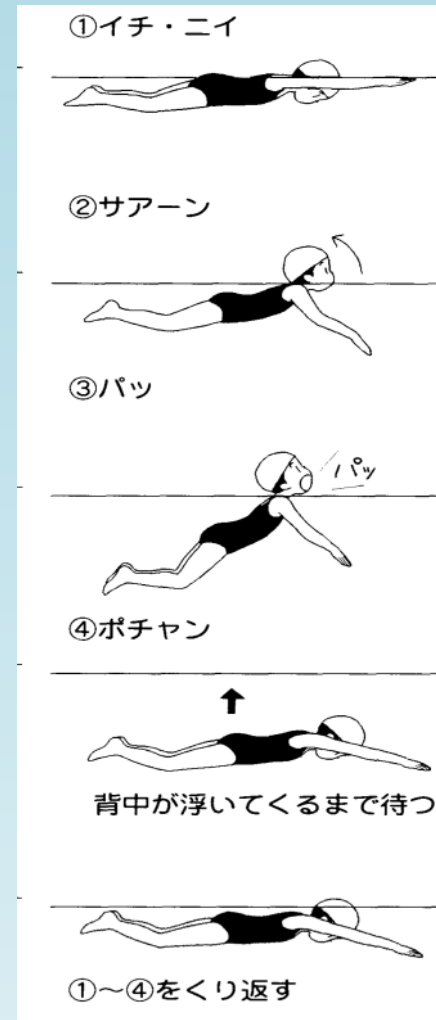


キックを1回

ワンキックドル平
「トーン・スー・スー・パッ」

⑤多様なドル平

リズムをかえたドル平
「トーン・スー・トーン・パッ」



⑥近代泳法



平泳ぎ



クロール



うねりを加える

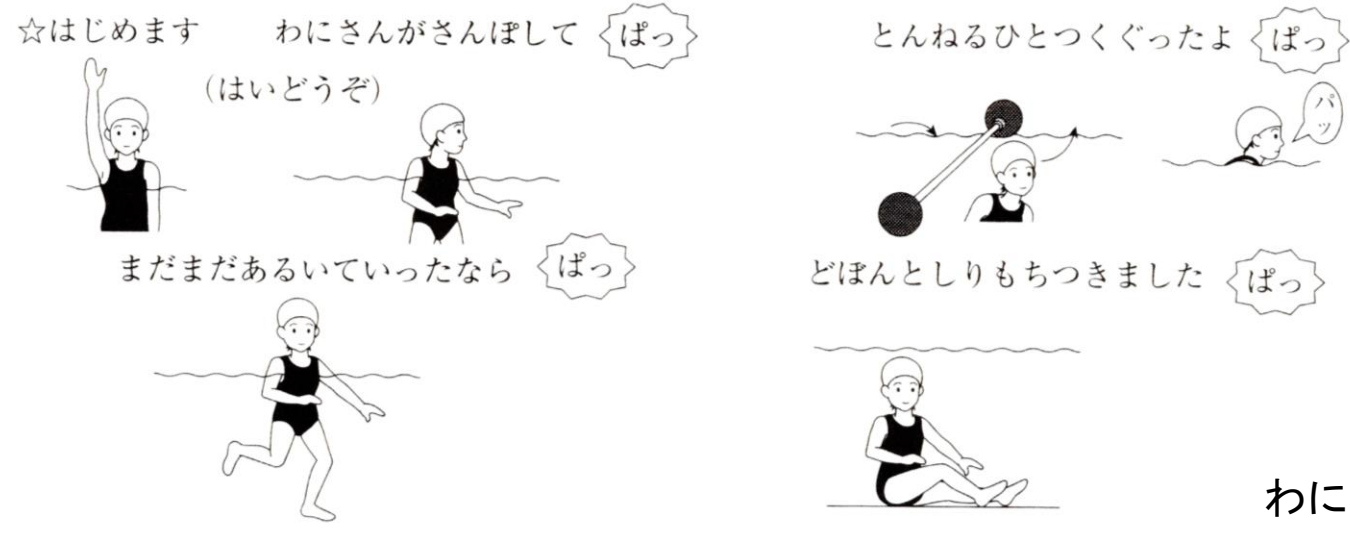
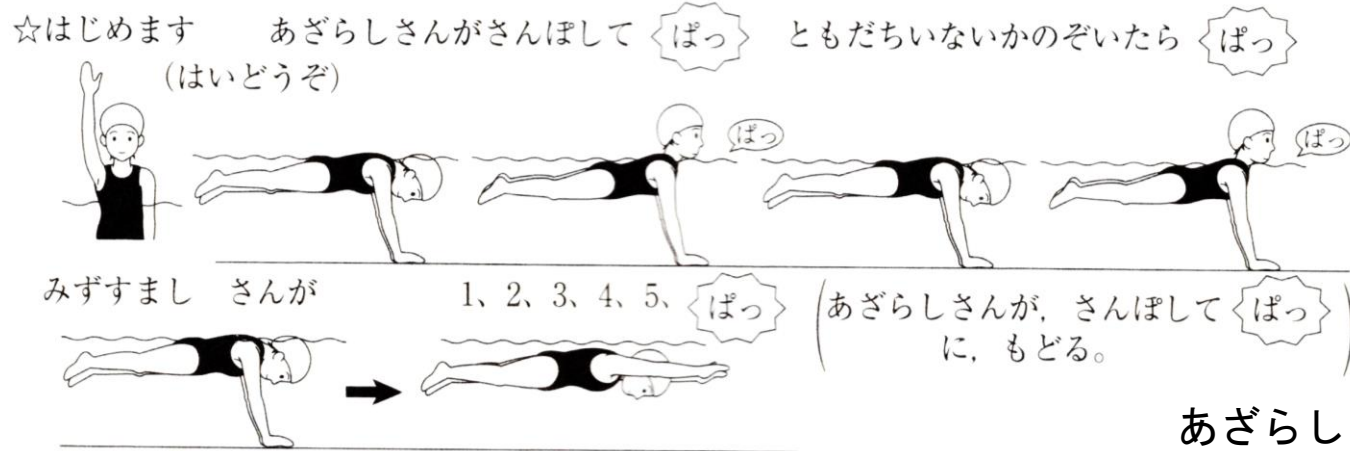
バタフライ「トーン・トンパッ」

お話水泳

従来の低学年の水泳指導はドル平の下請的な段階と考えられてきた。



しかし、浮けたからと言ってすぐにドル平の系統性に結びつけるのでない。多様な身体操作の経験から「水遊び」独自の世界を広げたり、また、「表現」としての可能性も含まれたりしていることがわかってきた。



分科会でのドル平指導

水泳分科会（主に大阪水プロ）では、沈み込みの少ない息継ぎにするために、**ゆっくりとした首の動作**を重視している。

「ニューツ」とした首の動きの習得は困難なので、初期の段階から時間をかけて教えようとする。従来行ってきた分科会での指導法と、沈み込みやうねりを使って泳ぐ小平サークルの指導法にはこのような見解の相違がある。

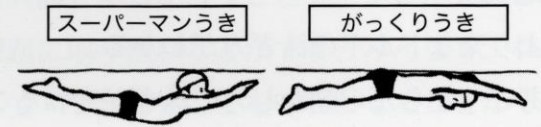
また、ワンキックかツーキックかという問いにも、ゆっくりとしたドル平を目指す小平サークルと、4拍子のリズムによって動きを獲得させようとする点での相違がある。

指導法の交流をすることで長短が分かり、現在ではそれぞれのやり方を取り入れ、ドル平の指導を行っている。

ドル平泳法の指導手順

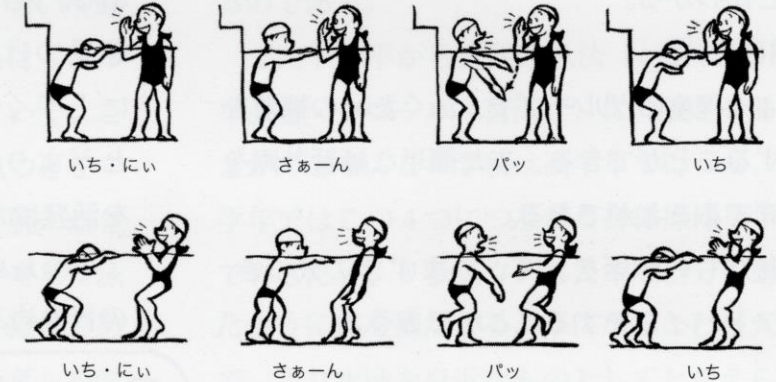
浮き方

あごの上げ下げ(見るところをかえること)によって浮き方が変わる。



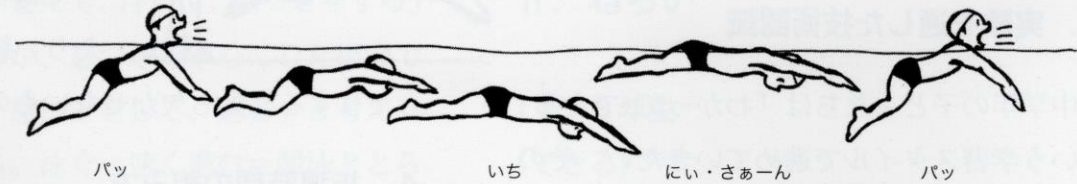
息つき

息つきは「パツ」と勢いよく息を吐き出す。そのとき、あごを動かして、水面からあごがでたら「パツ」をする。リズムは「いち・にい・さあ〜ん・パツ」。



ふし浮き呼吸

浮きながら息つき「パツ」をする。すると体が沈むが、がっくり浮きを行い、背中が水上にできるまでじっと待つ。浮いたらあごを上げて息つき「パツ」を行う。息つぎの時、手は軽く水をおさえるようにすると良い。リズムは「いち・にい・さあ〜ん・パツ」。

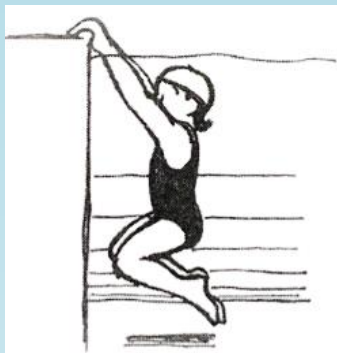


ドル平

ふし浮き呼吸に足をつけて行う。「息つき」や「ふし浮き呼吸」のときと同じリズム（いち・にい・さあ〜ん・パツ）で行う。徐々に「けってー、けってー、のびてー、パツ」に変えていくと良い。



小平サークル（東京）の水泳指導



小平サークルの特長は、**浮力を用いた呼吸法**をまず習得させ、斜め浮きからドル平へ、そして**ワンキックドル平**から近代泳法に繋げる所にある。

物体が水の中に落ちると、沈んだ後は比重が1より小さい場合は浮力によって水面に上がろうとする。その力を最大限に利用して呼吸が行われるので、無理なく呼吸することができる。プールサイドを両手で持ち正座位になり呼吸法を身につける。次の段階として、斜め浮きからドル平を習熟していく。キックもワンキックであり、伏し浮きの状態を長く保ったドル平が完成される。

ドル平泳法の指導手順

★プールの底につく足の裏

①壁に手を置いて正座で浮いて呼吸（連続10回）
下唇が出たら「パッ」。手に力を入れないでね。

②片手だけ手を置いて正座で浮いて（連続10回）

③両手を浮かべて浮いてきたら呼吸（連続10回以上）
「パッ」と同時に静かに水を押さえるんだ。

④上体を前傾させ、浮いてきたら呼吸（連続10回以上）
正座のまま。「パッ」のあと、あごを出すようにしよう。

⑤足の親指を底につけて、浮いてきたら呼吸（連続10回以上）
プールの底をけらずに親指の爪だけつけるようにする。

伏し浮きして立つ

⑥伏し浮き→呼吸→伏し浮き→立つ
手の動きはゆっくり、肩が出ないように。

⑦伏し浮きしながら呼吸の連続（10回）
頭の一部分が出た呼吸動作。同じリズムで連続してやろう。手の動きもゆっくり。肩が出ないように。

⑧ドル平

⑨ドル平で25～100m
「のびしてパーしてポチャンしてトーン」のリズム。あごが先に動き、その後で手が動くんだよ。

3. 水泳「水辺文化」分科会がやってきたこと

①学校づくり・職場づくりの重視

学級独自で実践が行えない。学年の同意が必要。

学校独自の教育課程があり、それに基づいた検定表、進級表がある。

②能力別指導（習熟度別指導）と対峙

能力別指導が一般的な水泳指導

③水泳実践の可能性を追究

「泳げてなんぼ」の水泳指導の見直し

90年代の教科内容研究



水泳「水辺文化」分科会 研究・実践の流れ

- (1) ドル平誕生から系統性研究(1960年代～)
- (2) 系統的指導とグループ学習の統一 (1980年代後半～)
- (3) 教科内容研究 (1990年～)
1995東京大会特別講座「中村敏雄講演」
- (4) 教育課程研究(2000年～)
分科会の名称を水泳「水辺文化」分科会へ
- (5) 授業づくり研究(2005年～)



(1) ドル平誕生から系統性研究(60年代～)

子どものつまずきが「呼吸」にあることに着目し、60年代に集団的な研究から考え出されたのが「ドル平泳法」である。

- 1958年 面かぶり⇒バタ足で泳げるようになる子どもは8% どんな子どもも泳げるようになる指導法を模索
- 1959年 子どもの立場に立った指導法の確立 水慣れ-蹴伸び-クロール(レグレス)-平泳ぎ(脱力強調)
- 1961年 第12回体育学会発表 初心者の水泳指導は「呼吸法」⇒「呼吸と手の結合」⇒「足の動作」が系統的な指導
- 1962年 第13回体育学会発表 泳げるとは「呼吸ができ」⇒「浮ける」⇒「進む」であること。
- 1965年 「水泳の初心者指導-ドル平泳法による指導-」が発刊
- 1968年 「ドル平泳法完成」ドル平から近代泳法への実践研究へ
- 1972年 叢書「水泳の指導」発刊 ドル平→バタフライ→クロール→平泳ぎ→背泳という発展過程

「ドル平泳法の教える中身を明らかにする」(85橋本)

「水泳の運動技術と主体的学習」(86大貫)

「考える・わかる指導系統へのアプローチ」(86大阪水プロ)

(2) 系統的指導とグループ学習の統一（80年代後半～）

技術認識を深め、それを学習集団が共通のものとしなければ、みんなが泳げるようにはならない。この課題を克服するために、グループ学習が実践の中心的な課題となる。

ドル平または近代泳法に至る技術の系統性について、子どもが観察や実験を通して見つけて行く授業であり、学習集団をどう組織するのかということに力点が置かれていた。従来の指示→活動という殆どの水泳指導で見られる一斉指導から、グループ学習への転換が図られていった。

「自分と友達 現在・過去・未来の泳ぎがわかる」(87飯島)

「ぼくらのドル平研究」(89黒野)

「泳ぎの感動を全ての子に」(90大貫)

「授業計画を子どもの手」(90中川)

「みんなでさがそう平泳ぎへの道」(93牧野)

「ドル平の秘伝書づくり」(95渋谷)

「みんなで泳げるようになろう。少し考えて」(00佐々木)

「6年個人メドレーに挑む」(06中川)



(3) 教科内容研究 (1990年～)

① 泳法の発展史を追体験する授業

- ・ 歴史の1地点に立たせて、どんな泳法が考えられたのを予想
- ・ 技術改良によって速くなることの理解
- ・ 昔の競技大会の再現

「水泳にも生き立ちがあったんよ」(94中川)

「平泳ぎはなぜカエル足か」(94牧野)

「水泳の歴史をグループで研究しよう」(96澤口・佐々木)

「クロールの歴史を学ぶ」(99牧野)

「背泳ぎはどうして生まれたのか？」(02牧野)

② 日本泳法そのものを扱う授業

- ・ 父母、祖父母への水泳の聞き取り
- ・ 近代泳法と違う日本泳法の良さを教えようとしたが・・・

「水辺文化の授業づくり」(97平田)

「3つの平泳ぎ」(97牧野)

「『日本泳法』実践化の可能性」(01牧野)

「和光中の臨海学校の取り組み」(08大和)

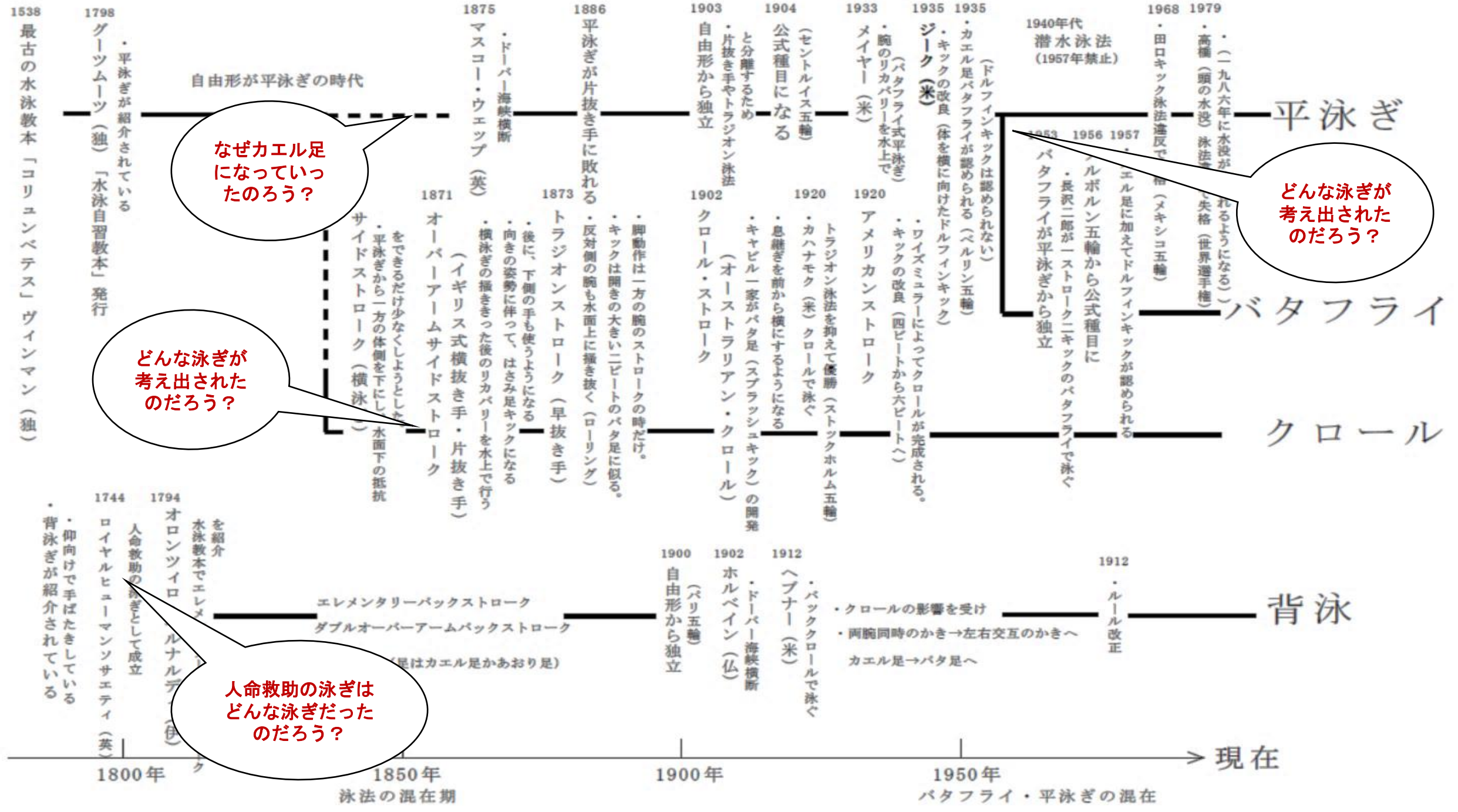
③ 低学年の水泳の在り方を検討

- ・ 表現としての「お話水泳」

「低学年のグループ学習」(94・95藤井)

「低学年のおはなし水泳」(98中川)

「いろいろな泳ぎに発展できる豊かな学びを」(05平田)



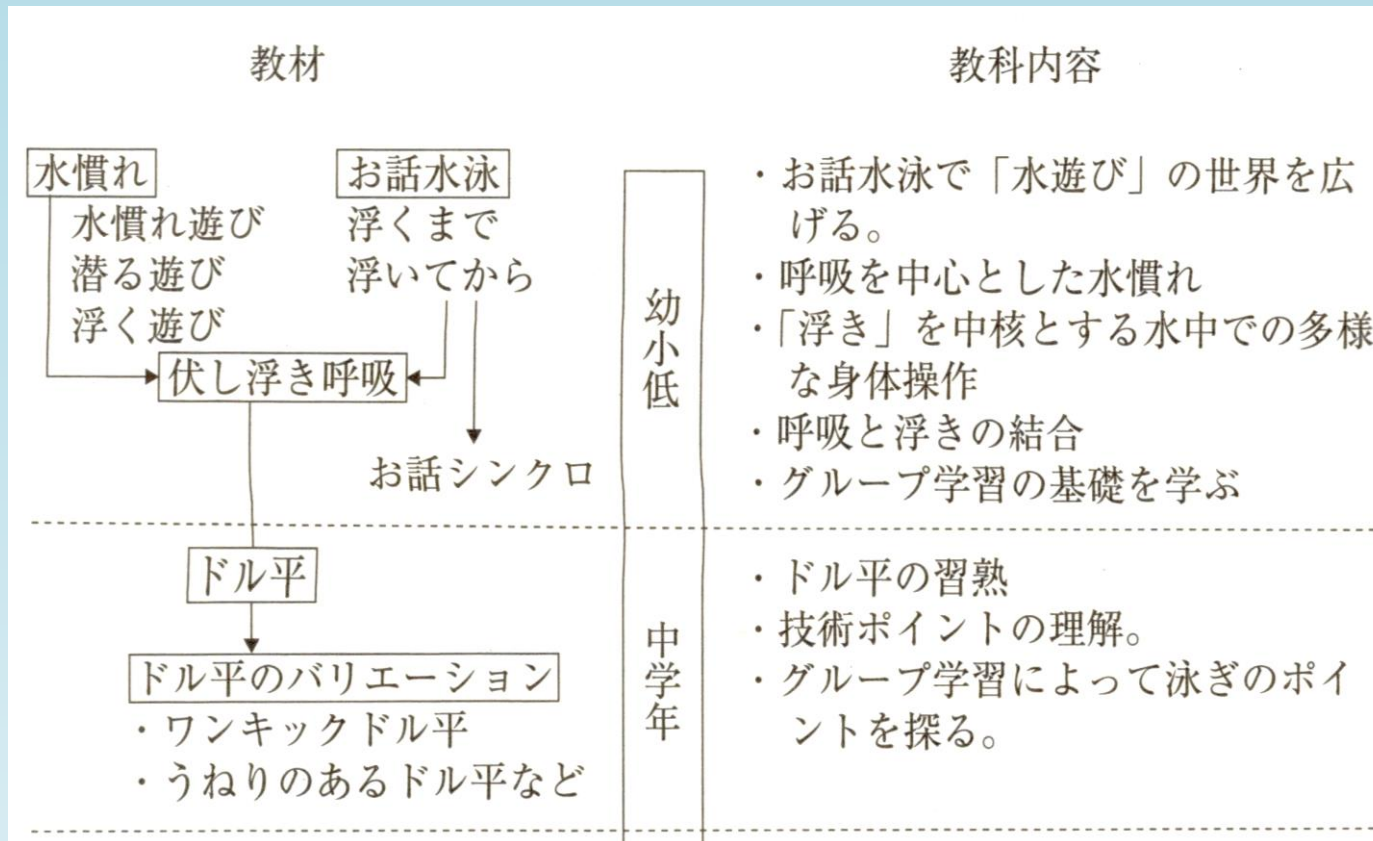
なぜカエル足
になっていっ
たのろう?

どんな泳ぎが
考え出された
のろう?

どんな泳ぎが
考え出された
のろう?

人命救助の泳ぎは
どんな泳ぎだった
のろう?

(4) 教育課程研究(2000年～)



低学年

「水慣れ～浮き～呼吸を含んだ浮き」という流れで学習を進める。「お話水泳」を教材とする。

中学年

ドル平習熟と近代泳法に繋がるドル平のバリエーション
(うねりのあるドル平やワンキックドル平、ドルクロなど)

「水泳の教育課程(小学校)」(02大阪水プロ)

「私たちの教育課程試案(高学年)」(03瀬見)

「水泳の教育課程をみんなが使えるものに」(04佐々木)

「教育課程をみんなのものに」(05中島)

<p>平泳ぎ クロール 背泳ぎ バタフライ</p> <p>日本泳法 (体験) 着衣泳</p>	<p>高学年</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近代泳法の習熟と系統性の理解 ・泳法の発展史 ・日本泳法の体験 ・教室でする水泳 ・水泳の知識と救助法
<p>競泳</p> <p>速さについての技術学習 個人メドレー シンクロ</p> <p>日本泳法を含む水辺文化</p> <p>臨海学習 横泳ぎ、抜き手、立ち泳ぎ</p> <p>教室でする水泳</p> <p>水泳の発展史 水着・プールなど</p>	<p>中学 (高校)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近代泳法の習熟 ・近代泳法の発展史 (歴史の追体験) ・日本泳法を学習 ・教室でする水泳 (泳法の歴史の理解、プールや水着) ・水泳実習を通しての自治的活動

高学年

近代泳法を学ぶが、習熟だけでなく、歴史を学ぶことを通して近代泳法が推進力を増す泳ぎ、抵抗を少なくした泳ぎであることなどを学習する。

日本泳法の体験

中学校・高校

競泳
日本泳法

- 「水泳の教育課程 (小学校)」(02大阪水プロ)
- 「私たちの教育課程試案(高学年)」(03瀬見)
- 「水泳の教育課程をみんなが使えるものに」(04佐々木)
- 「教育課程をみんなのものに」(05中島)

現在の実践動向

○シンクロ実践（リズム水泳、音楽水泳）

- 「集団リズム水泳」(06有馬)
- 「5年生のシンクロ」(11池内)
- 「お話水泳や歌声水泳（15児玉）」
- 「音楽水泳で楽しい水の世界を」(19中島)

○日本泳法の教材化

水泳の授業はプールという「静かな水」で泳ぐという限定されたものに対して、うずまき（洗濯機、流れるプール）で「動く水」を作って「日本泳法」を教えるという実践も続けられている。

- 「動く水でのドル平指導」(12牧野)
- 「流れる水でクロールを泳ごう」(13佐々木)
- 「静かな水から動く水への水泳指導」(16牧野)

○水泳の意味を問い直す

支援学校、支援学級での水泳指導、何のために泳ぐのかを問う

- 「肢体不自由児にドル平を指導して」(07渋谷)
- 「河根小の水泳 4年間」(12中岡)
- 「水泳から命を考える」(17中島)。



動く水（渦巻き）中を平泳ぎで泳ぐ



順下から抜き手で泳ぐ

水泳「水辺文化」分科会のこれから

○水泳指導のジレンマ

分科会では、初心者指導のドル平から、ドル平から近代泳法に繋げる系統性研究を深めてきた。それは分科会の成果であるが、中村氏の意図とはかけ離れた方向に研究・実践を進めてきたということも事実である。

ドル平の目指すものは競泳ではないと分かっているにもかかわらず、そうせざるを得ない日々の授業がある。



だからこそ、「水辺文化」を研究の対象として、教材化を試みてきた。水泳をトータルに教える授業の実現を

○これからの課題 例えば、

- ・ 自然との関わりの中での水泳を教える。
- ・ 水と人との科学的な内容
- ・ 日本泳法の実践化

しかし「水辺文化」は「水泳軽視」に本当に対峙できるのだろうか？

4. これからの水泳の在り方について

民間委託は避けて通れない問題として

だから、どう闘っていけるのか、どんな発信ができるのかを考えましょう。
(英語教科化の二の舞にならないためにも)

- ・ 再び「教師が水泳指導を行わなくても良いのか？」
- ・ 能力主義の教育が強調されることへの問題